

自然災害をどのように考えたらよいか(講義 I)

リスボン大震災(1755年)の問いかけに学ぶ

2013年11月1日 9:00-10:30

関西聖書神学校(神戸)にて

ごあいさつ

今回、関西聖書神学校のお招きを受け、「自然災害」をどのようにとらえたらよいかという問題を講義させていただくことができ、光栄に思っている。

この神学校は、私がクリスチャンになった時から、深い関わりがあった。日本福音同盟や福音主義神学会では特別お世話になった。また、私の所属する日本バプテスト教会連合には、たくさんの卒業生が活躍してくださっている。日頃から、深い敬意をもっていた。今回、このようなお交わりの機会を与えられ、特別うれしく思う。

序

二回の講義は、「自然災害をどのように考えたらよいか」というテーマで話すよう、要請されている。そこで、一回目は、「リスボン大震災の問いかけに学ぶ」というタイトルで、二回目は、「ヘブル人への手紙 2章より学ぶ」というタイトルで話させていただきたいと思う。二つの講義を通じて、「自然災害を罪の結果としてとらえるのではなく、被造物の共同管理を委ねられている者としてとらえるべきである」ということを訴えたいと思う。

今日の講義の内容は、学生の皆さんには耳新しいことが多いと思う。できれば、信仰の問題ではなく、神学上の問題として受け止め、今後教会や教団の働き人として仕えるためにお役に立ちたいと思っている。祈りつつ、お聞きいただければと思う。

また、クラスの終わりには、質疑応答の時を持ちたいと思う。遠慮なく質問、コメント、批判をいただければと思う。

それでは、龔尚中氏が、最近のベストセラー『続・悩む力』において、日本の宗教界は被災地支援のボランティア活動を熱心に行っているが、この震災の意味に対する本質的な問いかけには沈黙を守っていると苦言を呈していることを紹介することから始めたい。

確かに、東日本大震災後日本のキリスト教界においても、たくさんの講演会・シンポジウム・研修会などが開かれてきたが、「自然災害をどのように考えたらよいか」という核心に迫る話は聞かえてこない。そこで今回の講義では、この問題を真正面から取り上げ、神の働き人として備えられたいと思う。

日本は世界でも珍しい地震多発国である。戦後50年間は、大きな地震に見舞われることなく、いわゆる地震安定期を過ごしてきた。しかし、1995年の阪神大震災の頃から、日本列島の地震帯は、世界規模での連動を背景にしながら、活発に活動するようになった。最近では、新潟県中越沖地震(2007年)、東日本大震災(2011年)、長野県北部地震(2011年)と続いている。近い将来、関東から九州の太平洋沿岸地域に南海トラフを中心とした複合的な巨大地震が起こることや、首都圏に直下型の大地震が襲うことが予測されている。私は神奈川県に住んでいるが、富士山の噴火という問題もしばしば取り上げられている。

このような地震だけではない。日本では、毎年いくつもの台風を経験しなければならない。異常気象や水害、ハリケーンや落雷、そして山火事など、自然災害と言われるものはたくさんある。むろん災害は、このような自然を原因とする事柄だけでない。交通事故や思いがけない事故、さまざまな事件に巻き込まれること、病気、家族内の不幸な出来事など、人災に近いことにも出くわす。天災と人災とは区別できないことも多い。いずれにしても、私たちはこれらの災害に備えなければならない。

むろん、人災であれば、人間に責任があり、それに対応しなければならないし、できるはずである。それゆえに人災というのだから。ところが、自然災害になると、手の打ちようがない。そのようなとき、多くのキリスト者は「愛の

神がどうしてこのような災害を起こすのか」という問いを抱く。「神は全知全能で、すべてを支配している」と信仰告白する以上、このような疑問をもってはいけな。それは不信仰である、と考える人もいるだろう。しかし、そう信じたいからこそ、悩まざるを得ない、というのもまた真実である。いわゆる「認知的不協和」が起こっているわけで、これはキリスト者特有の問題と言ってもよい。私自身は、そう感じる人を不信仰と批判しない方がよいと思う。

皆さんの多くは牧師になられると思う。私は、牧師は誰でも、その問いかけに答える責任があると思う。しかし実際には、このような問いかけをされた少女に向かって、ローマ法王が「私にも分からない」と答えたように、ほとんどの牧師や教職者は、質問者を満足させる答えを返せないのではないだろうか。せいぜい、「神のみ心は分からない。神は最善をしてくださる。だから、すべてを全能の神のみ手に委ねていこう」というぐらいで、お茶を濁さざるを得ないのではないだろうか。私自身は、皆さんには、そのような働き人になってもらいたくない、そういう思いで、この講義をしている。

ここで、私の個人的な体験を話させていただきたい。

2004年12月26日、スマトラ沖を震源地とする地震が起こった。そのとき私はシンガポールの日本語教会で奉仕していた。シンガポール自体はその地震による被害をほとんど受けなかった。しかし、インドネシア、タイ、ミャンマー、インド、スリランカなどの近隣諸国には、死者数が20万人にも及ぶ甚大な被害に見舞われた。¹ これらの国々はいずれも、宗教が大きな影響力をもつ国家である。その後しばらくの間、ユダヤ教、イスラム教、プロテスタント、カトリックなどさまざまな教職者が集い、「その時(地震の時)神は何をしておられたのか」というテーマでたくさんのシンポジウムが開かれた。当時の私は、このようなタイトルにひかれ、時間の許す限りあちらこちらの集いに出かけた。

しかし残念ながら、どこに参加しても満足できる答えは得られなかった。それぞれの宗教家たちの主張点が浮き彫りにされ、面白いとは思ったが、失望しながら帰宅の途につくのが常だった。福音派キリスト教のプレゼンテーションのほとんどは、「神のみ旨は分からない。しかし、何が起こっても、神が主権者であることを信じる。イエスは苦しむ者、悩む者と共に歩まれた。だからキリスト者もまた、被災者に寄り添うことが求められている」というようなものだった。「そのとき神は何をしておられたのか」というテーマからすると、何か詐欺に遭ったような感じをぬぐえなかった。

以来、「地震や津波のような自然災害をどのように受けとめたらよいのか」という問題は、私にとって重要なテーマになった。そしてこの問いに答えるには、震災にのみフォーカスを当てるのではなく、聖書の教え全体の流れの中でとらえ直す必要があると、徐々に考えるようになった。

I. 東日本大震災をめぐるこれまでの議論

東日本大震災が起こって2年数か月が経過した。この間、キリスト者の間では、教会や神学校、各支援団体のセミナーなどにおいて、たくさんのシンポジウム、講演会、座談会などが開かれた。また書物も出版された。そのほとんどは、「物質的な支援をどのようにしたらよいのか」、「被災者たちの心のケアにどのように向き合ったらよいのか」といった具体的・実際的な方法論に関わるものだった。むろん中には、震災の本質に迫ろうとする講演(説教)もなかったわけではない。この講義では、その一つ一つの陳述を取り上げ、評価する時間的余裕はない。ただ、神学生であれば当然心得おかねばならないこととして、これまで語られてきたことの内容を大雑把に六つに分類し、私の個人的感想を交えて紹介させていただこう。²

1. 根本的な変革を迫られている

多くの発言者(ここでは、書物の執筆者及びシンポジウムの発題者の牧師、大学教授、神学者などを総称して「発言者」と呼ぶ)が、「今回の大震災は自分の信仰にとって大きなチャレンジとなった」と語っている。「神からの

1 このスマトラ沖地震はマグニチュード9.1の巨大地震で、20万人以上の死者が出た。その後もこの地域では、①2005年3月28日(8.6)、②2007年9月12日(8.5)、③2009年9月30日(7.5)、④2010年4月6日(7.8)、⑤2010年5月9日(7.2)、⑥2010年10月25日(7.7)、⑦2012年1月10日(7.2)、⑧2012年4月11日(8.5)と、年に一度の頻度で起こっている。むろんその地域の地震がハイチ地震(2010年)やニュージーランド地震(2011年)、中国奥地の各地における地震、そして今回の東日本大震災に連動していることは間違いない。

2 幸い、さまざまな会合で語られた内容が書物として出版されている。それらの文献は、自然災害の神学的な意味を問いかけている私たちにとって貴重な資料である。私が出版した『資料集』(以下略)の「参考資料4」を参照していただきたい。

変革の迫り」という表現が、キーワードであるかのように随所に出てくる。

東日本大震災は、「千年に一度」・「未曾有の」・「想定外の」といった言葉が飛び交うほどの地震や津波だった。それに加え、原発による被害も加わった。従って、その被害は近年経験した自然災害をはるかに超え、日本人全体を震撼させるものだった。

しかし、それぞれの発言者の危機意識はそれほど切羽詰まっているようには思えない。というのは、起こってしまった東日本大震災についてははともかく、今後巨大地震が日本列島近郊に起こることが予測されているにもかかわらず、そのことに対して危機意識をもっている発言者は意外に少ない。ほとんどの発言者は、聖書や神学、教会の世界に留まり、従来の思考の枠から出てはいない。「神からの迫り」の実態が何なのかよく分からず、そういう気分戸惑っているというような印象を受けるだけである。³

2. 終末論に結びつける

発言者の中には、東日本大震災を「終末の裁き」と結びつけて論じている人が少なくない。この場合、終末の裁きを「この世の終わり」と見なす悲観的な見方と、「新しい世界の始まり」と見なす希望的な見方に分けられる。どちらの立場であれ、津波にすべてを流されつくしてしまった惨状を前にすれば、誰でも終末的衝撃に襲われることだろう。ましてこの度は、放射能による見えない恐怖が加わった。しかし、震災を「終末の裁き」に性急に結びつけ、悲観的になったり、恐怖感や厭世的気分になるのはよくない。むしろ、幻想の終末的な世界に安全地帯を求め、逃げ込むようなことをしてはいけない。直面している問題には一つ一つ、真摯に対処する責任がキリスト者にはあるのである。

聖書は確かに、終わりの時代に地震が世界の各地で起こると警告している。私も、キリストの再臨は近いと信じている。しかしイエスは、人々のいろいろな噂には惑わされないようにとも語られた(マタイ 24:3-14)。東日本大震災のような自然災害は、それほど頻繁ではないにしても、世界各地に起こっている。従って、ある一つの地震とキリストの再臨とを直接結びつけて論じるなら、ちょっと時間が経つと恥をかくことになる。東日本大震災のような巨大地震であっても、悲しいことではあるが、数年もすれば、東北の片隅で起こった一つの出来事に風化していく。終末に絡ませて語ってもよいような地震などないのである。⁴

3. ヨブの体験と結びつける

多くの発言者が、不条理な苦悩を経験したヨブと東日本大震災の被災者に類比関係を見出している。ヨブの喪失感に被災者の苦悩を重ね合わせたくなるのは分かる。だが、ヨブに対する試練は、サタンがヨブの信仰に疑いを持ち、神に訴え出たことに起因する、極めて特殊なものである(ヨブ記 1-2 章)。東日本大震災の被災者が受けている苦しみは、ごく通常的な自然災害によるもので、異質なものである。いくばくかの類似点を取り上げ、安易に聖書から語ることは、気をつけた方がよい。

もしヨブ記を被災者との関連で用いるのであれば、ヨブと友人たちが延々と繰り返す「因果応報思想に基づく神義論」を取り上げるとよい。被災地には、因果応報や罰の思想で苦しんでいる人々が少なくない。彼らのそんな思いわずらいが無意味であることを示すには、ヨブと友人の問答は役立つはずである。イエスは、「盲目に生まれついたのは、この人が罪を犯したのではなく、両親でもありません」(ヨハネ 9:3)と盲人に語りかけた。この言葉ほど、被災者たちに安堵感を与える言葉はない。またヨブは、友人たちとの論議や長老からのアドバイスには満足できず、ただ神から、被造物の内に隠されているご自身の神秘的な力を直接示されて初めて、絶対的な宇宙の主権者の前にひれ伏した。このようなヨブの神体験を、上手に被災者に証してあげるなら、被災者に対するすばらしいメッセージになる。

4. 詩篇作者たちの苦悩と比較する

3 あるシンポジウムでは、「いかにしてもう一度立ち上がるかーこれからの 100 年を見据えてー」というテーマが掲げられていた。「100 年を見据える」とは、実際問題としてどのような中身を想定しているのだろうか。日本及び日本の教会が現在置かれている状況に対しての現状認識は甘く、言葉だけが独り歩きしているように思う。

4 キリストの再臨は、いつの時代のキリスト者であっても、自分が生きている間に起こると信じて歩む出来事である。パウロは、実際にはそうではなかったが、自分の生存中に再臨のキリストに出会うと信じていた(Ⅰテサロニケ 4:15,17)。もし再臨を時系列的な面から見ると、パウロは間違っていたことになる。しかしキリスト者が再臨を待ち望む理由は、(死んでよみがえられたキリストは私の救いを完成するために迎えに来てくださるという)キリスト論あるいは贖罪論にある。この観点から言えば、パウロは間違っていないのである。キリストの十字架の死が私のためであったと信じるのが「過去の現在化」であるとすれば、私が生きている間に再臨のキリストに出会うと信じるのは、「未来の現在化」である。キリスト信仰とは、この両者を含んでいる。震災によって終末が近いと感じて再臨のキリストを待ち望むのは、聖書的な再臨待望ではない。

ある発言者たちは、被災者のうめきを詩篇に見られるさまざまな苦悩と関連づけている。説教という脈絡の中であれば、むしろそれは許容範囲内に属するであろう。しかし、詩篇の作者たちは皆、基本的には神と契約を結んだ「神の民」である。そして彼らの苦悩は、それが(ダビデやソロモンのような)個人的なものであれ、(出エジプトやバビロン捕囚のような)共同体的なものであれ、神が契約を破棄し、民を見捨てられたのではないかと感じるところから出発したものである。ところが、東日本大震災で被災された人々の背景は異なる。個人的なレベルや何らかの共同体(地方や国家)に起因した罪などとは無関係である。あくまでも、自然のリズムの中で生じた自然災害である。この点を曖昧にして説教すると、聖書を使いながら聖書のメッセージを取り次いでいることにならなくなる。

最近の説教では、聖書を聴衆に合わせて物語的に語る事が流行になっている。聴衆のニーズに応じて説教することは当然である。しかしそれは、聖書をあちらこちらつまみ食的に語ってもよい、ということではない。そういう説教をし続けると、聖書自体をして聴衆に語りしめるという「説教の王道」から逸脱する。聖書全体の正典性を掲げながら、良いとこ取りの主観的な説教しかしなくなると、聴衆が根無し草のクリスチャンになっていく。それでは、キリスト者たちは「神の国」の使命は果たす者として成長せず、教会がこの世界に埋没していくのは時間の問題となる。

5. イエスの姿に類比を求める

多くの発言者が、福音書に見られるイエスの姿を被災者に示そうとしたり、被災地の支援活動のモデルに見立てようとしている。確かにイエスは、この地上で飢えた人の空腹を満たし、病んでいる人を癒された。共同体から締め出された人々を迎え、さまざまな縛りの中にある人々を解放した。この受肉されたキリストの姿は、目に見えない神の本姓を明らかにしている。従って、このような「人に仕えるキリストの姿」を被災者に示すことは的を得たことと言えよう。支援活動に励むキリスト者のモデルになぞらえることもまた、彼らに大きな励ましを与えるだろう。

しかし我々は、全く次元の異なる問題を扱っている。受肉されたキリストは、死んでよみがえり、「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」と宣言された(マタイ 28:18)。そのような全世界の支配権をもつキリストが、どうしてこのような悲惨な震災を見過しているのか、そういう問いかけを突きつけられているのである。万物の創造者であり、歴史の支配者であるキリストについて尋ねられているのに、そのことは横に置き、「イエスは悲しむ者と共にいて、涙を流しておられる」などと話すのは、ごまかしである。問われている問題からは逃げ、聞かれていないことを答える、そういう不正直な教職者にはならないでほしい。⁵

「イエスは被災者の傍らで最も悲しんでいる」とか、あるいは「この震災の中でもっとも痛みを感じているのは神である」などと、簡単に言わないでいただきたい。私は、そういう福音派の風潮を憂える。中には、イエスが「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ 27:46)という十字架上の叫びを、被災者たちの叫びになぞらえる人もいる。イエスの叫びは、どんな人間にも理解できない贖いの奥義が隠されている。類比するときは、細心の注意を払っていただきたい。

被災者たちの絶望的な状況を「墓に横たわる土曜日のキリスト」になぞらえる人もいる。これもおかしな話である。普段の礼拝では「よみがえられた日曜日のキリスト」を説きながら、震災の状況を説明する段になると、土曜日に戻ってしまう。これでは、「ガリラヤ湖で嵐に難儀している弟子たちを見た途端、イエスは眠り始めてしまった」と語るようなものだ。聖書に書いてある通り、「イエスは眠りから覚め、風や海を叱られた」と説教していただきたい(マルコ 4:35-41 参照)。

6. 自然的な災害と捉える

ある発言者は、地震や津波は自然災害であり、超自然的な原因や意味を問うことは無駄だと主張している。キリスト信仰から離れた一般社会であれば、このような理解は当然である。普段「神も仏もない」と言っている人たちが、災害に直面した途端、「神よ、どうして」などと叫ぶのは自己矛盾である。しかし普段そう言っている、彼らに宗教心が全くないわけではない。自分の理解をはるかに超えた自然災害に直面すると、普段眠っている宗教心が突然目覚めるということはよくある。キリスト者はそういう人間の深層心理をよく理解し、彼らの問いかけに真摯に対峙すべきである。

キリスト者は普通の人々とは異なる。普段から、神を「全能の創造者、歴史の支配者」として礼拝している。一羽のスズメさえも神のみ許しがなければ地に落ちることはないし、神はお互いの髪の毛までも数えておられる、と信じ

⁵ フィリップ・ヤンシーは、被災地を訪れ、『痛むとき、神はどこにいるのかーフィリップ・ヤンシー来日講演集』という書物を著した(いのちのことば社、2012年)。ヤンシーの問題は、自然災害と人間が経験するさまざまな苦悩とを区別せず、「苦しみ」という一つのカテゴリーで論じていることにある。

ている。そういう神を信じるからこそ、なぜあのような悲惨な震災が起こったのか、と問わざるを得ないのである。ここにある矛盾をどうしてくれるのか、そういう叫びに、教職者は答える責務を負う。そのために、この講義はなされている。一人一人がこの講義を聴いて、自分の答えを用意しておかねばならない。

II. リスボン大震災をめぐる論争

これまで我々は、日本の教会の中で、キリスト教の教職者たちが述べていることを概観してきた。それでは、私たち自身は、自然災害をどのように考えたらよいのか。その問いに答えるには、リスボン大震災をめぐる啓蒙思想家たちの論争を手掛かりにするのがよい。キリスト者の中で地震や津波の問題が神学的に大きくクローズアップされたのは、「リスボンの大震災」の時が初めてだったからである。⁶

1755年11月1日、カトリックの大主教の座があったリスボンの街に大地震が襲い、津波と火災による甚大な被害をもたらした。当時の多くのキリスト者は、自らの信仰に対する疑いや戸惑い、不信をもつようになった。啓蒙思想の真っ盛りな時代ということも手伝い、キリスト教神学はその根底からゆさぶられることになった。

しかし誠に残念なことだったが、正統的なキリスト教神学は、啓蒙思想家たちが問題にした事柄を受け止めきれず、切り捨てる道を選んでしまった。カトリックは伝統的なスコラ哲学・神学に安住を求め、プロテスタントは自分たちの教派信条を隠れ家とした。教会は結局、カトリック、プロテスタントを問わず、啓蒙主義をバイパスして、今日に至ってしまった。これが今日の教会の神学を貧しくしてしまった最大の原因である。⁷ 福音派は、ごく最近まで、近代・現代の哲学的貢献の一切を無神論的として拒否し、17世紀のスコットランド常識哲学にすがりつきながら神学的作業を進めてきたのである。

昨年3月東京で、「東日本大震災国際神学シンポジウム」が開かれた。そこにホアン・マルチネス博士(アメリカのフラー神学校教授)が講演者の一人として招かれた。私は、「大災害時におけるキリスト教的応答:教会史から」という興味深い題を見て、すぐ「リスボンの大震災」について話すのだろうと考えた。ところが私の期待はずれた。リスボン大震災については何の言及もなく、ローマ帝国の陥落(410年)、ロンドンの大火(1666年)、ハイチ地震(2010年)の三つの災害が取り上げられた。しかし、リスボン大震災については、一言の言及もなかった。今の教会史や思想史の学問的伝統においては、リスボン大震災はさして意味のある出来事だとは思われていないのである。⁸

6 リスボン大震災については、次の文献を参考にした。Ana Christina Araujo, *The Lisbon Earthquake of 1755 – Public Distress and Political Propaganda*. University of Coimbra. Boxer, C. R. *Some Contemporary Reactions to the Lisbon Earthquake of the 1755*. Lisbon: Revista da Faculdade de Letras, 1956. Kendrick, T. D. *The Lisbon Earthquake*. Philadelphia: Lippincott, 1956. Edward Paice. *Wrath of God: The Great Lisbon Earthquake of 1755*. London: Quercus, 2008. New Shradly, N. *The Last Day: Wrath, Ruin, and Reason in the Great Lisbon Earthquake of 1755*. New York: Viking, 2008 など。

7 東日本大震災を論じる文脈において、「リスボン大震災」にふれているのは、新免氏や上沼氏など、ごくわずかである。新免貢氏は、「小論、リスボン大地震に寄せて」『滅亡の予感の中で家の生き方に戻る』(新教出版社、2012年、49-67頁)において、ルソー、カント、ヴォルテール、ゲーテ、ウェスレーなどの論述をかなり詳しく紹介している。上沼昌雄氏は、2012年3月6日号の「神学モノローグ」でリスボン大震災にふれている。いずれの場合も、この事件から自然災害の本質に迫るような論議は展開されていないが。

8 私の手元にある「教会史」関係の書物では、一冊を除き、リスボン大震災についてはふれていない。例えば、E・ケアンズ著『基督教全史』、エミール・G・レオナルド著『プロテスタントの歴史』、ウィリントン・ウォーカー著『近・現代のキリスト教』、園部不二夫著『図解キリスト教史』、ハンス・フォン・シューベルト著『教会史綱要』、半田元夫・今野国雄著『キリスト教史Ⅱ(世界宗教史叢書2)』、高柳俊一、松本宣郎編『キリスト教の歴史(2)』、J. ペリカン『キリスト教の伝統、第五巻、キリスト教教理と近代文化』、水谷誠著『総説・キリスト教史3、近・現代篇』などである。一冊の例外とは、L. J. ロジェ著『キリスト教史7—啓蒙と革命の時代』(平凡社、2006年)である。その214頁には、「(ボンバル侯は)それより以前、1755年の諸聖人の大祝祭日にリスボン市の大半を破壊し、三万人以上の犠牲者を出した大地震の際にも、多数の神父が説教壇で、この出来事は、反宗教政策を罰する神の審判だと言ったのを咎め、彼らを死刑にしていた。」と記されている。しかし残念ながら、啓蒙思想家たちの神学論争には一言もふれていない。なお、次の教会史の書物においても「リスボン大震災」については一言の言及もない。フスト・ゴンサレス著『キリスト教史・下巻—宗教改革から現代まで—』(新教出版社、2003年;原書の出版は1985年)、井上正己監訳『キリスト教2000年史—The History of Christianity—』(いのちのことば社、2000年)、Roger E. Olson, *The Story of Christian Theology—Twenty Centuries of Tradition & Reform* (InterVarsity Press, 1999)、Mark A. Noll, *Turning Points (Second Edition) – Decisive Moments in the History of Christianity* (Baker Academic, 1997, 2000)、Mark A. Noll, *The Rise of Evangelicalism – The Age of Edwards, Whitefield and the Wesleys* (InterVarsity Press, 2003)、Jonathan Hill, *the History of Christian Thought* (InterVarsity Press, 2003)など。

だが、教会の外、一般社会では少々異なる。結構多くの有識者たちが、啓蒙思想家たちの葛藤と問題意識を共有し、東日本大震災にからませて取り上げている。⁹ むろんそのほとんどは、キリスト教神学に対して否定的な立場からのもので、ヨーロッパの文明史的な評価を下しているに過ぎない。しかし私には、彼らの方が人間としての苦悩を正面から受け止め、東日本大震災の哲学的・思想的本質に迫ろうとしているように見える。クリスチャンではないからと、簡単に一般の思想界を侮ってはいけない。

1. リスボン大震災とはどのようなものだったのか

世界には地震の起こりやすい地域がたくさんある。地球の表面を支えている12のプレートがぶつかり合う場所(これを「海溝」という)がそれである(他に、直下型の地震もある)。リスボン付近がその一つであることは、今日よく知られている。その近郊では、これまでしばしば大きな地震に見舞われてきた。¹⁰

1755年11月1日、それはカトリックにとって最も重要な祭日「諸聖徒の日」だった。時刻は午前9時40分。突然の大音響と共に激しい揺れが2分間続いた。さらにその2,3分後、3回目と4回目の揺れがたて続けに起こった。かくてこのわずか20分ほどの間に、リスボンの街のほとんどが全壊した。富裕層の住む高層ビルも、貧しい庶民の住むみすばらしい家々も、そして教会も例外ではなかった。市内にあった41教会のうち30以上の教会が完全に崩壊した。建物の崩壊は火災を誘発し、強い風も手伝ってリスボン市内のほとんどすべての地域が火の海と化した。リスボンの中心部には5メートル幅の地割れができた。

地震からおおよそ90分後、11時近くになると、15メートルもの巨大な津波が数分間隔で4波、5波と押し寄せ、港や市街地を襲った。津波は川をさかのぼり、川周辺の建造物を一瞬にしてさらってしまった。津波はただの高い波というようなものではなく、ありとあらゆる瓦礫を巻き込んだ、10メートル以上の高さの凶器で、港や広場に避難していた市民を瞬く間に飲み込んでいった。かろうじて津波から逃れた人々も、市街地に燃え盛る火事に巻き込まれ、逃げ場を失い、命を落とした。この炎は何と5日間も燃え続け、街のほとんどを焼き尽くしてしまった。

地震はそれで終わったわけではなかった。2週間後の11月18日から19日にかけて、大きな一連の余震が再びリスボンの街を襲った。この結果、リスボン市内の建物の85%が破壊された。被害の比較的少なかった建物であっても、火災を免れることはできなかった。推定されるマグニチュードは8.5から9.0。震源地はサン・ヴィセンテ岬の西南西約200キロ。当時のリスボンの人口は27万5千人だったが、そのうち3万人から6万人の人々が地震及び津波によって命を落とした(死者数は2万人から9万人までの諸説あり)。

この地震による被害はむろん、ポルトガル国内に留まるものではなかった。地震の揺れは遠くフィンランドからアフリカ北部、グリーンランドやカリブ海にまで及んでいた。モロッコなどの北アフリカ沿岸地方には、高さ最大20メートルの津波が押し寄せたとの報告もある。イギリス南部やアイルランド西部でさえ、高さ3メートルの津波が襲い、建物に甚大な被害をもたらした。

2. リスボン大震災をめぐっての論争

9 佐々木中氏は「砕かれた大地に、一つの場処を」(河出書房新社編集部編『思想としての3.11』(河出書房新社、2011年)の12-13頁において、「リスボン大震災は、ヴォルテールやルソーなどの啓蒙主義者たちがライプニッツなどを代表とするキリスト教神学者たちを困らせた事件」と述べている。中井久夫氏は、「戦争から、神戸から」(『思想としての3.11』の53頁)において、リスボン大震災とフランス革命を結びつけている。小林義之氏は、「出来事の時、資本主義+電力+善意のナショナリズム」(『思想としての3.11』の129頁)において、「カントがリスボン大地震の後『地震論』について言及しているのは、『崇高論』を説くためには安全である大地を必要としたからである、と述べている。亀山郁夫氏は、「深い衝撃、いくつか断片をつなぎながら、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』(『震災以降を生きるための50冊、現代思想7月臨時増刊号』(青土社、2011年)の27頁において、『カラマーゾフの兄弟』をヴォルテールの『カンディード』になぞらえている。美馬達哉氏は、「災害をめぐって」(『震災以降を生きるための50冊、現代思想7月臨時増刊号』の49-50頁)というエッセイの中で、ルソーとヴォルテールの対話を、「論争といっても、二人の哲学者が地震という社会的事件をキリスト教批判ないし文明批判を披歴したと言うべきものです。天災と人災の区分を巡るルソーの論点あたりは興味深いのですが、神学的な論争そのものは、東日本大震災以降の私たちにとって、ピンと来るような内容ではない気がします」と述べている。橋本一径氏は、「不可避の破局を回避するために、ジャン＝ピエール・デュピュイ『ツナミの小形而上学』(『震災以降を生きるための50冊、現代思想7月臨時増刊号』の63-64頁)において、デュピュイがリスボン大震災にふれていることを取り上げている。

10 今分かっているだけでも、紀元前60年、47年から44年、紀元後33年、384年には大きな地震があった。近代になると、その地域の地震帯はさらに活発に活動しており、14世紀には7回、16世紀には5回、17世紀には3回、18世紀にも3回(1724、1750、1755年)、地震に見舞われている。いずれの場合にも、その当時の記録はほとんどなく、地震の大きさや被害状況は分かっていない。(リスボンの街と歴史、大震災、その後の復興などについては「参考資料6」参照)

リスボン大震災をきっかけに啓蒙思想家たちの間に大きな論争が起こった。この論争は、キリスト教神学にとつとでも重要なものだった。だが、キリスト教界はこの論争に誠実に向き合おうとはしなかった。その結果、教会はいまだ、自然災害に対する健全な神学を確立しえないでいる。

①「神の裁き」という通俗的な理解

リスボン大震災のニュースは、間をおかずして、ヨーロッパ中に広まった。11月6日発行のリスボン新聞の記事は汽車や船によって運ばれ、11月11日にはベルリンの新聞、11月22日にはフランスの新聞、11月26日にはロンドンとオランダの新聞、12月5日にはコペンハーゲンの新聞に掲載された。

新聞の報道は情報の一部に過ぎなかった。時間と共に、地震を体験した人々の話、日記、絵画、家族や商取引の人々の間に交わされた手紙、旅行者たちの証言、それにたくさんの噂話が入り乱れ、人から人へと伝わっていった。それは、聞く人々の恐怖心を掻き立て、ある人たちの足を教会に向かわせた。

やがてひと時の興奮状態が静まってくると、いろいろな場所で、震災の意味を問う会話が漏れ出してきた。それは、ヨーロッパ中の家庭、教会、大学、各種学校、文化ホール、公共施設、街の広場などで、格好のテーマになった。多くの人々は、カトリック及びプロテスタントを問わず、「地震は神の御手によってもたらされた神の裁きである」と信じていた。¹¹

当時のヨーロッパの人々にとっては、震災を「神の裁き」と見なすのはごく普通のことだった。1666年のロンドンの大火の時も、1750年にイギリスで起こった一連の地震の時も、「神の裁きが始まり、終わりが近い」という緊迫感が民衆の間に広まった。メソジスト教会の創立者ジョン・ウェスレー(1703-1791年)やジョージ・ホイットフィールド(1714-1770年)は、1750年のロンドン地震の直後には、イギリス各地を巡回し、伝道集会を開いて信仰覚醒運動を展開した。リスボン大震災はその5年後のことだが、多くの人々がこの震災を「神の裁き」と見なしていた。¹²

②ジョン・ウェスレーの「リスボン大震災に対する考察」

ジョン・ウェスレーは、リスボン大震災後すぐ(1755年)、「最近のリスボン大震災に対する真剣な考察」という文書を公刊した。¹³そこには、当時のプロテスタントの説教者たちの考え方が明白に表明されている。この見方は、今の福音派のクリスチャンたちがもっている考え方とほとんど変わらないのではないかと思う。自分の周囲の人々を見回しながら、じっくり考えていただきたい。

ウェスレーはまず、リスボンの地震によって何万という死者が出、家屋が崩壊したことに哀悼の意を表する。そして、このような災害は、自然的な原因による偶然的なものを見なすことはできないと述べる。

聖書には、雨、風、雷、稲妻など様々な災害が出てくる。それらはすべてある目的をもって神が背後で動かしていることである。もしそう理解しないなら、神の摂理を否定することになる。むしろ、自然的な理由が存在しないわけではないが、それらの一つ一つもまた、自然の支配者の指示に基づいて起こっているはずである。

人は地震に出くわしても、地を静めることはできないし、飛んで逃げるわけにもいかない。どれほどの富を積んでも、何の役にも立たない。もし地震に直面したら、心を低くし、祈る以外にない。霊とまことをもって神を礼拝する時のみ、偉大な神の祝福にあずかることができる。神は愛である。あなたが神を愛するなら、神はあなたの神であり、あなたの父であり、あなたの友である。自分の魂を欺いてはならない。あなたが神を愛するなら、悲しみの真ただ中で、神の豊かさ、誉、喜び、幸せを学び、実感するであろう。

ウェスレーのこのようなメッセージは、当時のプロテスタント教会の共通理解に近かった。プロテスタントの説教者たちは、地震をカトリックに対する神の裁きと見た。リスボンはカトリックの街である。これまで世界中のカトリック教会を援助し、海外の植民地にカトリック信仰を布教してきた。地震の起こった11月1日はカトリックの祭日「諸聖人の日」だったし、その時間はミサの真最中だった。多くの聖堂は完全に破壊され、跡形もなくなった。これこそ「カトリックに対する神の裁き」でなくて、何であろう。当時のプロテスタントの信者たちがそう考えたのも無理もない

11 リスボンのイエズス会の指導者マラグリダは、「地震は人々が神の前に静まり、悔改めるために与えられた」と説いた。地震の9か月後に起こった余震を見て、彼は「神の怒りはまだ止んでいない。政府の復興事業は早すぎる。再建計画はその場しのぎの不毛なものだ」と厳しい政府批判を展開している。

12 ドイツのヒルデンスハイム町議会は、このリスボン大震災のために特別祈祷会を開いた。ヨハン・カール・コーヘン牧師は詩篇104篇32節から「地震の中での主の御声」という説教を語った。そのインパクトはとて大きく、後に「地震の中で、地震学かそれとも神を認めることか(Seismotheology or recognition of God in the earthquake)」という書物を出版した。彼は、「地震に直面し、人生に対し用心深さと成長を遂げる好機にしなければならない」と説いた。

13 「参考資料7」参照。

ことだった。

18世紀半ばは啓蒙主義花盛りの時代だった。近代の学問が開花し始め、産業革命が勃興した。科学的・技術的思考は一般民衆にも浸透し始め、従来の考え方に縛られない新しい息吹が芽生えていた。地震の災害を道徳的・倫理的・宗教的な問題にすり替えてしまうことに違和感を持つ人々は、少なくなかった。啓蒙主義思想と聞くと、ごく一部の思想家、哲学者、科学者の専有物だと考えやすい。しかし事實は違う。それは時代の風潮であり、根強い一般民衆の支持に支えられていた。

「このような震災は、神の予定やご計画の中に何処まで入っていたのか」、「神はなぜ、数万人にも及ぶ罪なき人々の命を一瞬にして葬るようなことをされたのか」、「何の目的で神はこのような災害をもたらしたのか」……。この種の問いは、誰の心にも浮かんでくるものだった。啓蒙主義の哲学者・思想家たちは、ただ彼ら民衆の代弁者に過ぎなかった。

それでは、ヴォルテール、ライプニッツ、ポープ、ルソー、カントなど、啓蒙思想家たちの論争をたどってみよう。

③ヴォルテールの「リスボンの災害に対する詩篇」

ヴォルテール（1694-1778）は、リスボン大震災が起こったときジュネーブに滞在していた。その彼に震災の報告が届いたのは3週間後の11月23日だった。その報告を聞いて彼は、翌24日に銀行家のジーン・ロバート・トロンチン（彼の経済関係のアドバイザーだった）宛ての手紙に、「（人間が人間を裁く）異端尋問所の崩壊を歓迎する」と書いている。このことは、彼が普段からいかに大きな怒りを異端尋問所にもっていたかを示している。

その一週間後の12月の初めに、ヴォルテールは「リスボン大震災についての詩」を書きあげ、友人たちに送った。¹⁴ その詩は後に（1756年3月）、「リスボン大震災に関する詩篇、または『すべては善である』という公理の検討」という書名で公刊された。それまでヴォルテールは、信仰者に見られる根深い迷信や無意味な殺人を繰り返す異端尋問、さらに聖職者の悪行や教会の墮落などについて繰り返し批判してきた。ところがこの詩の中では、教会や聖職者、宗教などについては一言もふれなかった。むしろ、ライプニッツの『弁神論』やポープの『人間論』が提唱した楽観主義に対し、痛烈な批判の矢を向けたのである。¹⁵

この詩においてヴォルテールは、まず楽観主義に生きる哲学者たちに向かって、リスボン地震がもたらした痛ましい悲惨な現実を注視せよ、と訴える。

『すべては善なり』と叫ぶ迷妄の哲学者たちよ、来りて見よ、
この廃虚、残骸、屍を。
手足は千切れ、石の下に折り重なる女、子供。
何万という不幸な人々が、血を流し、引きさかれ、屋根の下敷きになって、
ヒクヒク動きながら、あわれ、責苦のうちに最期をとげるのだ。」

続いてヴォルテールは、地震が罪深き人々を罰したのであれば納得する。だが実際には、何の罪もない人々を悲惨のどん底に追い込んでしまった。このことは到底許すことはできないと、怒りを哲学者や神にぶつける。

「これでも諸君は、自由にして善なる神の永遠の掟の結果だというのか。
神の復讐はなれりというのか。
母の乳房の上で血にまみれる嬰兒が何の罪を犯したであろう。
リスボンは、快楽にふけるロンドンやパリよりも多くの悪徳をもったというのか。
リスボンは潰滅し、パリでは踊っているのだ。」

そしてヴォルテールは、このような惨状の世界は、決して「美しい予定調和の世界」ではないし、「すべては善なり」という世界でもない。人間はなぜ、自然の不条理な暴力にこれほどまでに翻弄されなければならないのか。人間の生活は、自然の力の前では「悲しい偶然の戯れ」にすぎないのか。哲学者の楽観論はもはや何の役にも立

14 ヴォルテールは、この詩と共に「自然法に関する詩篇」というもう一つの詩を添えて、彼の友人たちに送った。その詩は、たまたま同時期にジュネーブにいたルソー（彼はその生涯の大半をフランスで過ごしていた）のもとにも届いた。そこから、リスボン大震災に関するヴォルテールとルソーの対話が始まる。

15 ヴォルテールに関する参考文献は、ヴォルテール著『ヴォルテール回想録』（大修館書店、1989年）、ヴォルテール著『カンディード（岩波文庫）』（岩波書店、2005年）、ダニエル・モルネ著『十八世紀フランス思想—ヴォルテール、デイドロ、ルソー』（大修館書店、1990年）、高橋安光著『ヴォルテールの世界』（1979年）118-119頁、永田英一著「リスボンの震災について — ルソーとヴォルテール」九州大学文学部創立四十周年記念論文集（1966年 1011-1063頁）など参照。

たない。地上にこのような悪が存在する限り、楽観主義を放棄しなければならなくなる、と切々と訴える。¹⁶

④ライプニッツの「弁神学」

このヴォルテールに対してのルソーの反論は、とても興味深い。だが今は、問題をより正確に理解するため、ヴォルテールが論敵に選んだライプニッツ（1646-1716）やポープの考えについてふれておこう。

1710年、ライプニッツは、『弁神論』という書物を著した。この書は、「神の正義、人間の自由、悪の起源」というテーマを論じた、650頁にも及ぶ大著である。彼の主張を簡単に紹介しておこう。¹⁷

世界は永遠の存在ではなく、始まりがあった。神はその世界を創造するに際し、知性の要求と意志の要求という二つの条件を満足させたはずである。第一の条件は、被造物に見られる「自然法則」という秩序の中に実現している。この自然法則は、「全く任意のもの」とも、「絶対に必然のもの」というわけでもない。むしろ、「適合の原理」あるいは「最善の原理」に基づいている。つまり、一切は決定されているのだが、その決定は、神が英知を用い、善意の意思をもって、自由に選択した結果なされたものである。

第二の条件とは次のようなものである。神は世界を創造される前に、被造物をどのように創造しようかとあらゆる可能性を考えた。そしてその中で、最善の案を選択し、それを造ろうと意思を働かせたはずである。神の世界創造は、十分な理由に基づいてなされた以上、この現実の世界は「あらゆる可能的世界の中でもっとも善いもの」ということになる。

さらに、「悪」については次のように述べる。「悪」には、形而上学的な悪、物理的な悪、道徳的な悪の三種類がある。第一の「形而上学的な悪」とは、「完全性の欠如」を指す。被造物はすべて不完全なもので、完全性を欠如している。もし被造物が完全なものであるとすれば、それは神になってしまう。第二の「物理的な悪」とは、自然現象や人間の肉体の苦痛に見られるような悪をいう。神は、人の幸福を願っているが、それが神の唯一の目的なのではない。部分の要求のために全体の秩序と美を犠牲にするわけにはいかない。被造物世界は、全体的協和が完全に実現していくことにある。部分が最終目標なのではない。第三の「道徳的な悪」とは、神に由来するものではなく、人間に与えられた自由の結果生じたものである。人間の自由は善用されれば聖化の手段となり、悪用されれば滅びの道に向かってしまう。¹⁸

確かに、この世界には、悲しみをもたらす「戦争」、「飢餓」、「災害」など、さまざまな悪が存在する。しかしそのことをもって、神にこのような世界を創造した責任を問うのは正しくない。たとえ個別的にさまざまな悪に見えるものが存在するにしても、全体として見れば、世界は調和している。最終的には悪は善に飲み込まれ、信仰と理性は調和される。

以上が、ヴォルテールが批判した「ライプニッツの最善観（あるいは楽観主義）」である。ライプニッツの考えは、自然災害の問題に多くのヒントを与える。ある人はヴォルテールと共に、「ライプニッツは甘い」と批判するだろう。一方、「ヴォルテールの批判は見当はずれだ」と、ライプニッツを高く評価する人もいよう。どちらにしても、ライプニッツの「弁神論」が神学の宝庫であり、自然神学にとって不可欠の書物であることは変わらない。いつか時間を見つけ、ライプニッツの書物をじっくり読んでいただきたい。現代の神学にはない、興味深い論述に感動すると思う。

⑤ポープの「人間論」

アレクサンダー・ポープ（1688-1744）は、1734年（45歳の時）『人間論』という書物を著した。¹⁹ 彼は、ライプ

16 ヴォルテールの悲観主義は、リスボン大震災に始まったわけではない。彼は40歳から50歳ぐらいまでの10年間（1734-43年ぐらいまで）は、楽観主義そのものの世界に生きていた。ところが、その後の50歳から60歳までの10年間（1744-55年）は、人生の辛酸をなめつくし、悲観主義者に転向していた。従って、リスボン大震災に対する悲観主義的な反応は、ごく自然なことだった。

17 ライプニッツに関する参考文献は、増永洋三著『ライプニッツ・人類の知的遺産 38巻』（講談社、1981年）76-79頁、ライプニッツ著『弁神論（上）』（ライプニッツ著作集、宗教哲学第6巻）』（工作舎、1990年）、ライプニッツ著『弁神論（下）』（ライプニッツ著作集、宗教哲学第7巻）』（工作舎、1991年）、ライプニッツ著『弁神論（人類の知的遺産 38巻）』（講談社、1981年）326-350頁、ライプニッツ著『形而上学叙説—世界の名著』（中央公論社、1969年）375-399頁など参照。

18 ここには、アウグスティヌスの「悪」に対する理解より、より深い発展が見られる。今日、悪の問題を考えるときライプニッツをスタートにして論じる神学者たちが増えている。例えば、フランスの哲学者ジャン＝ピエール・デュピュイは、「物理的な悪」を「自然法則的な悪」と、「人間が意図しないにもかかわらず暴力的な悪となってしまう悪」とを区別する。人間社会の悪を考慮するとき、このような視点の導入も有益である。そうしないと、たとえ原発問題を扱ったとしても、結局イデオロギーの対立以上の議論には進まず、神学的な深まりは出てこないことになる。

19 ポープ著『人間論—岩波文庫』（岩波書店、2001年）。

ニッツと同じような考えをもっていた。ただし、ライプニッツが分厚い書物で神学論議を展開したのに対し、ポープは美しい詩文体で、彼の最善観・樂觀主義を民衆に広めた。では、ポープの主張に耳を傾けることにしよう。

神は宇宙の体系を造るとき、あらゆる可能な体系の中で最善のものを選んで造られた。すべての被造物は「存在の連鎖」の中にあり、もし一つでも欠けてしまうと全体が壊れてしまう。部分が一見不完全に見えるものは、全体の真の完全さのためには必要である。(『人間論』18、30-31、32 頁)。

被造物全体は秩序だって造られ、生氣あふれた生命の連鎖である。人間はその最高位にある者として造られ(66 頁)、万物を支配している(78-79 頁)。人間個人の幸福は、その人個人の利益にあるのではなく、全体の利益の中にある(85 頁)。人は、自らを愛し、他の人を愛するとき最も幸福な存在となる(106 頁)。

ポープは、この詩集の中で、2 年前(1732 年)に起こったチリ地震について「神は一般的な法則に従って行動されるのであって、部分的な要求に応じて行動されるわけではない。部分的に悪に見えることであっても、全体的に見れば善なのだ」と述べている(24、32、34 頁)。

自然災害をどのように考えたらよいのかという問いに対し、この文章は一つの答えを提供する。多くのクリスチャンは、無意識のうちにこの種の考え方を身に着けているのではないかと思う。同意するにしても、拒絶するにしても、これを機会に改めて考えてみることは有益だと思う。

⑥ジャン＝ジャック・ルソーの「ヴォルテールへの手紙」

本来は、ヴォルテールからルソーへと論を進めるべきだった。しかし我々は、回り道をしてライプニッツとポープの思想にふれた。では、ルソーに戻ることにしよう。²⁰

ヴォルテールは「リスボンの悲劇の詩」を多くの友人たちに送ったが、その中の一人に、彼より 20 歳ほど若いルソー(1712-1778)がいた。ルソーは、ヴォルテールの詩を受け取ったのだが、彼の悲観主義にはどうしてもついていけなかった。そこで 1756 年 8 月 18 日、ルソーはヴォルテールに返信した。その手紙は、『ヴォルテール氏への手紙』として公刊されている。ではこの返信を基に、ルソーが考えていたことをたどってみよう。

ルソーは、社交辞令のあいさつをすませると、いきなり、ヴォルテールから受け取った時に自分が感じたことを率直に述べる。ヴォルテールが非難したポープやライプニッツの樂觀主義は自分を慰めるが、ヴォルテールの詩は自分を絶望の淵に追い込んでしまう(12 頁)。神は、「考えられ得る限りの世界の仕組みの中から、最小の悪と最大の善とを結び合わせる世界の仕組みを選択した」のであり、これ以上のことを神はできなかつたと、ライプニッツの考えに基づいて神を弁護する(13 頁)。

またルソーは、リスボン地震の被害が大きかったのは、人々が都市の密集した地域や高層住宅に住んでいたことにあった。あるいは、多くの持ち物に執着して、すぐに避難しなかった人間の我欲にあった。もし人々が分散して住んでいたなら、火災などの被害もはるかに少なくすんだはずである、と述べている(14-15 頁)。

続けて、ルソーの言葉をいくつか紹介しておこう。

「それゆえ、世界の作者は、その善意にもかかわらず、いやむしろその善意そのものによって、全体の保存のためには個人のいくらかの幸福を犠牲にすることがある」(21 頁)。

『すべては善である』と言う代わりに、『全体は善である』と言うか、または『すべては全体にとって善である』と言った方がよい」(21 頁)。

「楽天主義の真の原理は、物質の特性からも、宇宙の機構からもひきだされるはずのものではなく、もっぱら帰納法によって、すべてを司る神の完全さからひきだされる」(22 頁)。

いずれの言葉も、震災問題を考えようとする私たちにとって、挑戦的な言明である。なお、悪の起源は神の摂理に関わる問題だとして、ルソーは次のようなたとえをもって説明している。皮肉とユーモアに満ちた面白い例えである。

もし(1693 年から 1721 年に生きたフランスの盗賊)カルトゥーシュやローマ皇帝カエサルが、何らかの悲

20 ルソーに関する参考文献は、ルソー著『孤独な散歩者の夢想』(白水社、1986 年)、ルソー著「ヴォルテール氏への手紙」(『ルソー全集(第 5 巻)』(白水社、1989 年)9-38 頁、森口美都男著『ルソーの宗教観』(第三文明社、1979 年)、小林義彦著『ルソーとその時代、増補版』(大修館書店、1982 年)、中川久定著『甦るルソー』(岩波書店、1983 年)、井上堯祐著『ルソーとヴォルテール』(世界書院、1995 年)、沼田裕之著『ルソーの人間観—エミールでの人間と市民の対話—』(風間書房、1986 年)などがある。

劇的な事故によって幼年時代に命を落としたとする。すると哲学者は、「彼らがどんな罪を犯したので神は罰したのか」と言ったはずである。しかし実際には、この二人は幼年時代に死ぬことはなく、大人になって悪行を働いた。すると哲学者は「神はなぜ彼らのような悪党を殺さず、生かしておいたのか」と神を非難するだろう。しかし信心家の場合、もし彼らが幼年時代に死んでいたら、「神は父親からその子を奪うことによってその父親を罰そうとしたのだ」と言うだろう。しかし二人が死なない場合には、「神は民衆を懲らしめるため、子どもを生きながらえさせたのだ」と言うはずである。従って、どのようなことが起こっても、神の摂理は、信心家にとっては常に正しく、哲学者にとっては常に間違っていることになる。でも本当は、「神の摂理は間違いでもなければ正しくもない」。神の摂理は各個人の短い人生について心煩わすようなものではなく、被造物全体を司ることで満足しているのである(23-24 頁)。

ルソーのヴォルテールへの反論には、うなずける点も多々ある。しかし、そこまで言い切つてよいものかと首をかきげたくなるものも少なくない。どのように評価するかは、読者次第である。ただ彼らが、リスボン大震災を前にして、神の行動原理に関し真剣に格闘し、論じていた事実には目をつぶらないでいただきたい。

⑦ヴォルテールの小説「カンディード」

ルソーの手紙を受け取ったヴォルテールは、およそ一月後(1756年9月12日)、ルソーに返信する。その返信において彼は、今は哲学的な議論を楽しんでいる時ではないとルソーの反論を上手にかわす。そして、楽観主義がいかに浅はかなものであるかを再度指摘し、それ以上の議論に深入りすることを避けた。その代わり、その3年(1759年)後にヴォルテールは、『カンディード』という小説を出版し、ルソー及び彼と同じような楽観主義に立つ人々に、再度痛烈な批判をあびせた。²¹

この小説の主角カンディードは、ウエストファリア城で育てられた私生児の子供である。彼は、男爵の娘キュネゴンドとの恋仲に陥り、その家から追放されてしまう。城から追い出されたカンディードは、ブルガリア、オランダ、リスボン、カディズ、ブエノス・アイレス、パラグアイ、エルドラド、スリナム、パリ、ポーツマス、ヴェネチア、そしてコンスタンチノーブルまでの旅をする。それは、キュネゴンド嬢を慕い、追いかけての旅であったが、その途中で、多くの人々に出会い、さまざまな珍奇な体験をする。しかも最終的には、男爵にも、自分の恩師哲学者パングロスにも、そしてお目当てのキュネゴンド嬢にも再会する。

この物語は、カンディードが旅の途中に出会う人々を通じて、この地上は、人がおよそ想像することもできないようなありとあらゆる奇妙な、非人道的な、全く残酷としか言いようもない経験に満ち溢れていることを明らかにする。これら一連の出来事を通じて、哲学者パングロスの説いた「この地球は、すべての可能性の中で最善のものである」という楽観主義に対し、ヴォルテールは痛烈な批判を展開するわけである。

この小説でヴォルテールが人々に訴えたかったのは、「慈悲深い神が監督する我々の『最善の可能世界』において、すべての出来事は最善であるという楽天主義は本当なのか」という問いかけである。ヴォルテールは、災害によってリスボンが徹底的に破壊され、10万人もの人命が奪われた以上、神(創造主)が慈悲深いわけではないと暗に言いたかったのである。²²

この書は、読み方によっては、楽観主義の世界は完全に崩壊していると読むこともできる。しかしもう少し別の読み方をすれば、楽観主義にもそれなりに一理あると読むこともできる。いったいどちらがいいのだろうか。私にもよく分からない。皮肉屋ヴォルテールは「それは読者次第だよ」と言っているような気がする。この辺がヴォルテールという人物の面白さなのだろう。自然災害について考えようとしているお互いは、この小説をどのように読んだらよ

21 この小説は、初年度だけでも3万冊が売れ、その後20回以上版を重ねた。多くの翻訳もなされ、当時のヨーロッパ中の人々に想像以上の影響を与えることになった。ヴォルテールのもくろみ通り、ヨーロッパの一般大衆は、この小説を通し、リスボン大震災をどのように考えたらよいのかという神学的な作業に導かれていったのである。この書物は最初、パリやジュネーブの権力者たちから強い圧力がかけられた。表面的には放浪者の青年の冒険記のような体裁を整えているのだが、この書物が王族、貴族階級、軍隊、教会、異端尋問、形而上学、中でもライプニッツの楽観主義に対し、風刺的なあざけりを意図していることは、誰の目にも明らかだった。小説という形でこのような社会批判をされては、時の権力者たちも立つ瀬がなかったが、この書物の圧倒的な人気に彼らはひるみ、圧力をかけるのをやめて、静観を決め込んだ。

22 この旅の途中、カンディードはリスボン大震災の出来事に出くわす(5章から9章)。主人公はリスボンを訪れたとき、気がつくやうに瓦礫の中に半分埋められている自分を見出す。そこにおいて、周囲に異常な出来事が起こり、その危機から逃れて、何とか生き延びる。そういう事件の中で、リスボンのヒーローに「この地球はすべての可能性の中でベストだったか」という問いを語らせ、「どうしてそうであり得よう」と答えさせる。

いのだろうか？皆さんの感想を聞かせてほしい。私自身にはとっても興味がある。

⑧イマヌエル・カントの「地震論」

リスボン大震災は、カント（1724-1804）が31歳の時に起こった。それはちょうど、彼が学位論文を提出し、大学の員外教授として迎えらるる時期だった。彼はリスボンの地震の報告を手にし、大きな衝撃を受けた。そして震災の直後（1755年から56年にかけて）、地震に関する三冊の短い文書を次々に公刊した。では、最初出版された『地震論』の論文から、カントがリスボン大震災をどのように受け止めていたのかを探ってみよう。²³

カントはまず、地震は本来人々に大きな恐怖をもたらすものだが、恐怖をもたないで生きていられることは「摂理の恩恵」だと言う（235頁）。そして、地表に現れた地震現象を一つ一つ詳細に検討し、地下の空洞が一続きであると考え、地震の原因を考察する（236頁）。そして、どの場所のどんな方向が危険なのか、街を建設してはいけない場所はどこなのか、などといった問題を詳しく検証する（236-240頁）。さらに自然界の生き物が人間より早く地震を察知していた事実を取り上げ、彼らは自然科学者の知識をはるかに勝る能力をもっているはずだと推定する（243頁）。

カントの地震に関するこのような一連の科学的な説明は、現在の地震に関する知識から言えばむしろ不正確なものである。しかし、若きカントが、地震の被害や前兆現象などについて、できる限りの情報を集め、地震がなぜ起こるのかを科学的に解明しようと努力したことを評価すべきだろう。カントは、地震を道徳的なテーマから切り離し、無益な神学的な問題にすり替えないよう警告した。さらにカントは、もし燃えやすい材料で家を建て、地震で倒れてしまったとしたら、神の摂理に不満を言い得るだろうかと問いかけ、災害に対する人間の責任をも指摘する。この辺の論述はルソーにも通じるどころがあり、極めて興味深い。

Ⅲ. 啓蒙思想家たちの論争を踏まえて

これまで、リスボン大震災を契機に、啓蒙思想家たちがどのようなことを論じあったのかを見てきた。最後に、この論争から私たちが学ぶべきことを4点にまとめて話したいと思う。

1. 啓蒙主義に耳を傾ける

ヴォルテールとルソーは、リスボン大震災をめぐって真剣な討議を交わした。ライプニッツやポープの楽観主義的な神学理解が、震災にあっても有効なものかどうかという点がポイントだった。この論争を読み、ヴォルテールに親近感を覚える人もいよう。ルソーに感動する人もいるはずだ。さらにもっと別の考え方を思いつく人がいるかもしれない。いずれにしても、啓蒙主義者たちは自然災害を真正面から受け止め、キリスト教信仰や世界観の問題に取り組んだ。²⁴

ところが当時の教会および指導者は、彼らの論議をすべて無視した。自然災害については、疑問を発すること自体、不信仰、危険、異端的、高慢なことだった。災害は神の裁き以外の何ものでもないと言われ、それ以上突っ込むことはしなかった。うっかりした事を言えば、異端尋問所行きだった。

正統的な神学における人間観は極めて低いものだった。アウグスティヌス・ペラギウス論争以来、人間は全く墮落したもので、良きものは何もないと見なされていた。人間理性も決定的に破壊されており、神や信仰的な真理に対して発言する権利をもたなかった。神学は、聖書に啓示された事柄に限定されねばならないと考えられていた

23 カントの哲学については、たくさんの書物が出版されている。ここでは、「地震」に関わりのある、カント著『地震論』（『カント全集（第1巻）』233-244頁、理想社、1986年）、亀井裕著『解説・地震論』カント全集（第1巻）（理想社、1986年）351-353頁を紹介することに定める。

24 スーザン・ニーマン(Susan Neiman)は、*Evil and Modern Thought: An Alternative History of Philosophy* (Princeton University Press: N.J., 2002)において、リスボン大震災が啓蒙思想家に与えた影響について論じている。そもそも啓蒙主義的な発想は1252年にカスティーリャ王国(スペイン)の王に即位したアルフォンソ(Alfonso X)に始まり(14-18頁)、そこからライプニッツの弁神論が生まれ、ポープに引き継がれていく(18-36頁)。彼らは、悪に見えることも最終的には喜びに変えられていくもので、一時的にそのように見えるに過ぎないと楽観的な見方をした。ニュートンやルソーは、自然災害を道徳的な悪と明確に区別し、完全な自由意思が与えられた人間は自然的な災害に対しても責任を負わされたと考えた(36-57頁)。カントはさらにこの考えを徹底させ、自然災害と人の道徳的な悪とは全く無関係で、自然の法則性や科学の独立性を強調する(57-84頁)。そしてさらに、現代人の悪に対する意識がヘーゲル及びマルクスを通して形成されていく変遷をたどる(84-109頁)。本書は、悪の問題を考えるときの必読書である。

のである。

残念ながら、今日のキリスト教界もまた、カトリック、プロテスタント主流派、福音派を問わず、そういう閉鎖的な姿勢から抜け出せていない。むしろ現代は啓蒙主義時代とは異なっている。だから、「異端尋問所」を開くようなことはしない。といっても、自己絶対性を主張する教会の悪しき伝統はいささかも変わっていない。異端尋問よりはるかに効果的な「一切無視」という方法で、同じことをし続けている。

これまでキリスト教神学は、啓蒙主義やその思想家・哲学者たちの主張を無視してきた。だから、正當に評価することなどできなかった。感情的な危険視、無知な批判を繰り返し、軽蔑的な眼をもって一笑に付してきた。啓蒙思想家＝理性中心主義＝自由主義神学。そこには不信仰があるのみで、よきものは何もない、と思いついてきた。カトリック神学は、乱暴に言えば、アウグスティヌスからトマスを経て、第二バチカン公会議をたどればおよそのことは分かる、とされてきた。²⁵ プロテスタント神学もまた、アウグスティヌスから宗教改革者を経て、現代神学(それがバルトであれ、ファンダメンタリストであれ)の足跡をたどれば十分とされてきた。いずれも、啓蒙主義は飛ばされたのである。

しかし、1980年ごろになると、福音派にもさまざまな新しい動きが出てきた。そして、初代教会、ギリシャ教父、トマス以外の中世のスコラ神学者、近代の哲学者や神学者、それにバルトとバルト以降の神学者たちを真剣に見直し始めた。加えて、自然科学者たちの発言にも耳を傾けるようになってきた。私自身は、その流れを大切に、啓蒙主義者たちを加えなければならないと思っている。近代の哲学者や神学者を本当に理解するには、彼らをバイパスしては不可能だからである。

教会は、閉鎖性から脱皮し、この世界に出ていかねばならない。真の聖書信仰に立ち、福音信仰に固く生きながら、イエスが人間社会の真ただ中に遣わされたように、教会はこの世界に遣わされたのだ。この世界の人々は、時に、キリスト者よりはるかに真剣に、そしてはるかに正直に、社会の問題を憂え、対処しようと格闘している。啓蒙主義は、あの時代に、そのことを証していた。現代の教会は本当に謙虚になって、そういう声に耳を傾けるべきである。教会は、神の国を舞台に、この社会と自然界を管理する責任が委ねられているからである。この点を次の講義で取り扱う。

2. 自然神学に取りくむ

啓蒙思想家たちは、人間理性を土台に、この世界に起こるすべての問題を神とのかかわりにおいて神学的に考察することをためらわなかった。その結果、詭弁的な論理や無意味な神学論争に陥った側面がなかったわけではない。しかし彼らの意図は、基本的には、キリスト教の信仰を人間の歩みに真に意味あるものとするにはどうしたらよいか、という点にあった。簡単にひとくくりにして、不信仰者たちと断罪してはならない。自らを含め、すべてのキリスト者は時代の子である。このことを忘れてはならない。

現代のキリスト教神学は、その扱う内容を聖書の啓示的事項に限定し、キリスト教教理の枠内に留まる傾向が非常に強い。それはむしろ、人間理性を重んじる自由主義神学への反動からである。このことは、カトリック神学は言うに及ばず、バルト神学の強い影響を受けたプロテスタント主流派も、いまだ根本主義を完全には吹っ切れていない福音派においても、変わらない。しかしそろそろ、それぞれのグループは、そのトラウマを乗り越えていくべき時に来ている。現代のように個別の科学や学問が進むと、全体を統括する世界観をどうしても必要とする。さらに各分野における倫理や価値観の確立は、待たなしの状態にある。神の国の視点からこの世界のすべてを見直そうとするなら、これまでの教派神学や伝統的な神学意識では明らかに間に合わない。

第三回ローザンヌ委員会が宣言した「ケープタウン決意表明」は、「包括的な福音」をかかげ、キリスト者の社会的責任を強調している。ここには、従来の福音派の姿勢に比べれば、格段の進歩がみられ、うれしく思う。むしろ、日本を含めた欧米先進諸国がまき散らしている諸問題にはほとんどふれていないし、そこに言及されている一つの課題も、世界中の宣教地から課題として提示されたものが網羅的に並べられたに過ぎない。²⁶ 問題をど

²⁵ 第二バチカン公会議をめぐる神学的な動きは、ファーガス・カー著『二十世紀のカトリック神学』(教文館、2011年)参照。カトリック世界に起こっている問題については、ベルナルド・ルコント著『バチカン・シークレット』(河出書房新社、2010年)に詳しい。

²⁶ 「ケープタウン決意表明」は、ホリスティックな宣教・福音理解を提唱し、従来の福音派より深く踏み込んでいる。そこでは「個人的な責任」と共に、伝道の結果必然的に生じる「社会的な責任」を果たすよう強く求めている(39-40頁)。キリストの主権はあらゆる領域に及び、職場における真理の証やさまざまなメディア、芸術や技術なども宣教に有効に用いられると提唱している(45-50頁)。さらに、現代社会が直面している様々な社会問題、例えば、民族紛争の解決、抑圧された人々の解放、障害者への配慮、環境破壊を防ぐこと、人種差別の撤廃、ホロコースト、先住民族の大量殺戮、アパルトヘイト、パレスチナ問題、カースト制度による抑圧、部族の集団

のようにとらえ、どのように対処するかは、これからそれぞれの現場で煮詰めていかねば絵に描いた餅になる。この種の問題を扱うのは、聖書神学や組織神学ではない。あえて言えば、キリスト教倫理学の分野である。²⁷ つまり、啓示神学の枠を超え、自然神学的なアプローチが求められてくるのである。

自然神学的な課題は、その答えを聖書から直接引き出せるわけではない。たとえ関連する話題が聖書に記述されていても、その多くは叙史的であって、規範的なものはほとんどない。つまり、ある特定の時代に、特定の状況の中で、特定の人に起こった特殊な出来事である。従って、そこから永遠の絶対的な真理を導き出すことは、慎重の上にも慎重でなければならない。注意深く類比の原則を適用しながら、とりあえず有効な(役立つ)答えを導き出す努力を重ねていかねばならない。

自然災害を神学的に扱おうとすると、そもそも神が被造物を創造された目的は何だったのかというような問いから始めねばならない。そしてさらに、神が被造物の中に制定された自然法則とはどのような性格のものなのか、神は創造以降どのような関わりをもってこられたのか、今後いつまでも同じであると考えてよいのか、キリスト者は自然法則に属している事柄について、神に祈ってもよいのか、神はそのような祈りをどのような場合には聞いてくださり、どのような場合には聞いてくださらないのか、奇跡とはどういうもので、人は期待してよいのか、被造物は人間の墮落によってどのような影響を受けたのか、その被造物が虚無から贖われるとはどういう意味なのか、人間は被造物がもたらす災害にどのように関わればよいのか、自然災害を人が管理するとはどういうことなのか、そもそも自然災害とは何なのか、今の被造物は来たるべき新天新地においてどのような関係にあるのかなどなど・・・、無数の問題が出てくる。

聖書の中には、このような問題に対する直接的な解答があるわけではない。聖書は、人間の好奇心を満足させるために書かれたわけではない、と冷たくあしらうこともできよう。しかし、一つ一つの問題はキリスト者の信仰生活を根底から左右するような大切な問いである。単なる思いつきの好奇心ではなく、信仰者の根底に横たわる真面目な問いである。分からなくても信仰をもつことはできるが、それなしでは確信にあふれた信仰生活をおくるのが難しい。人間にとっては、理性と感情と意志とに一貫性が必要である。認知的不協和は、いつか信仰の破船が生じる。

3. 自然科学の成果を受け入れる

カントはリスボン大震災を経験したとき、地震を超自然的な原因に求めず、自然的な原因に求めた。つまり、地震がなぜ起こるのかという課題を科学的に解明しようとした。従って彼は「地震学」の父と言われる。その研究成果は、言うまでもなく 18 世紀半ばのものであり、今日の地震学からすれば幼稚なものである。しかし、地震の起源を超自然的なものではなく、自然現象そのものの中に追求するという科学的な姿勢は特筆に値する。

ところが、18 世紀から 20 世紀にかけてのキリスト教神学は、カント哲学を拒否したばかりでなく、カントの科学に向き合う真摯な姿勢をも無視してしまった。結局教会は、超自然的な原因にこだわり、ウェスレーの道を選んできたのである。福音派の教会は今でも、その後遺症の中にある。

たとえキリスト者であっても、自然災害は、カントに習って、自然科学的なアプローチによって対応しなければならない。それは、病気になれば医学的な対応をせねばならないし、農作物を造ろうとするなら農作業に必要なさまざまな知識を身につけねばならない。当たり前のことである。ところがこの当たり前のことが、地震の話になると、キリスト者の間では超自然的な話題に転化されてしまう。それはとても不思議なことだ。

自然災害を理解するには、地震学を受け入れる必要がある。そうすると、現代の自然科学が到達している様々の学問的成果を受け入れなければならなくなる。地震学は地球形成学を前提にしているし、その地球形成学は宇宙学を背景にしている。現代の生物進化学もまた、地球形成学に深い関わりを持ち、自然災害に関わろうとす

虐殺なども「キリスト者の社会的責任」として位置づけている(51-54 頁)。加えて、メシアニック・ジューの宣教(52 頁)、信教の自由などについての他宗教グループとの協働(66-67 頁)、教会内の諸問題(60-66、71-73、77-80 頁)、エイズ問題への対処(80-81 頁)、繁栄の福音の問題点(83-85 頁)などにまで踏み込み、客観的な評価を試みている。これらのガイドラインは、おそらく、今後 10 年の福音派のロードマップになることだろう(6、99 頁)。

²⁷ キリスト教神学はこれまで、聖書、神、キリスト、聖霊、贖い、終末など、聖書が啓示している教理的事項をその内容としてきた。神学＝教義学だった。その結果、従来の組織神学や聖書神学は、人間社会に起こる実際的な問題については扱えない。キリスト教神学は、そのような課題を扱う学問として「キリスト教倫理学」という学問分野を設定してきた。この種の問題を扱った良書としては、バルト著『キリスト教倫理(Ⅰ～Ⅳ)』(新教出版社、1984-85 年)及び泉田昭著『キリスト教倫理学』(いのちのことば社、2009 年)がある。ただしそのいずれにおいても、自然災害については一言もふれていない。

ると、この問題にも言及せざるを得なくなる。すべての学問は相互に関連しあっており、体系的・統一的な世界観に基づいているからである。

福音的なクリスチャンは、聖書信仰に立ちながらも、このような現代諸科学の学問的成果を受け入れる用意をしなければならない。これまでの教会は、科学研究を敵視し、科学的な新発見を信仰への挑戦と見なす傾向が強かった。このような「宗教と科学の対立・衝突」は、実に不幸な歴史だった。このような不毛な対立状況は、この辺で終わらせなければならない。²⁸ むろん、学問の世界は有神論的な世界観に立っているわけではない。通常、客観的・学問的であるということは、無宗教の世界観の上に成り立っている。といっても、一部のキリスト者が考えているように、科学はそれほど怪しいものではない。それぞれの学会は、特になしがらみがあり、おかしなところがたくさんある。しかし学問的成果は、どのようなものであれ、厳密な学問的手続きを経て検証されたものである。それは、基本的に信頼してよい。むろんその成果は日進月歩、絶えず変わっていく。すべては仮説である。仮に学会において定説になっていても、一つの発見ですべてが変わることもある。学問とは、そういうものである。すべては相対的な世界での営みである。キリスト者はその限界をわきまえた上で、最新の研究成果に学び、大胆に活用していくのである。

4. 自然災害に対応する

ルソーは、人間が都市に集中して住んでいなければ、リスボン大震災の被害を少なくすることができた、と述べている。あるいは津波から避難するとき、我欲に走らずに逃げれば相当数の人々が助かったはずとも考えている。カントもまた、もし木材ではなく別の材料で家を建てていれば、火災による被害を相当減らすことができた、と書いている。彼らは、自然災害に対し、人間がどのように対応したら被害を最小限にできるのかを真剣に論じていた。今日のキリスト者と教会は、この点で彼らの姿勢に学ぶべきではないだろうか。

日本では、東日本大震災を契機に、すべての都道府県において、自治体ごとに避災、減災、防災という問題に取り組むようになった。これは地震多発国に住む日本人にとって大事なことである。キリスト者はこの種の提案・指導に対し協力するだけでなく、率先して関わるべきである。キリスト者は、我らこの世のものに非ずと、無視を決め込むようなことをしてはならない。予想されるあらゆる自然の災害に対して、自分や家族、職場を含め、地域社会における対応に関わっていかなければならない。キリスト者は神の民であるとともに、自分たちの地域に遣わされた者たちである。可能な限りの自然災害への備えをしなければならない。「備えあれば憂いなし」とはキリスト者にとっても真理である。その聖書的根拠は、ヘブル人への手紙 2 章のメッセージにある。講義Ⅱを楽しみにしていただきたい。

キリスト者は、リスボンでの出来事を通し、たくさんのことを学ぶことができる。今日はそこまでふれることはできなかったが、ポンバル侯がリスボンの復旧・復興作業に発揮した計画や指導力には学ぶべきことがたくさんある。²⁹ 次第に独裁的になっていった点をも含め、危機的状況におけるリーダーシップの在り方の最大の教科書になるだろう。キリスト者は神の国の民としてこの世界の管理を委ねられている。そんな自然災害が起こっても、歴史はずっと続くという前提で、その責務を果たしていかなければならない。このような信仰と再臨信仰とは矛盾しない。

自然災害は、個々のキリスト者が個別に取り組むだけでなく、教会の問題でもある。リスボン大震災は教会の礼拝中に起こった。リスボンの教会はほとんど崩壊し、被害を大きくしてしまった。教会やキリスト者は神の守りが特別にあり例外である、などとは考えない方がよい。パウロも、「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練と共に、脱出の道も備えてくださいます」と述べている（I コリント 10:13）。

²⁸ 聖書は、古代の日常言語で啓示された神の言葉である。従って、現代の自然科学の結論に調和させながら聖書を解釈する努力を重ねなければならない。教会にも長い解釈学的伝統がある。従って、このことは簡単ではない。しかしキリスト者は被造物の管理者として召されたのだから、それを避けて通ることはできない。カトリック世界では、20 世紀初頭から進化理論を研究し続け、1995 年には対立関係の解消を宣言した。最近の欧米の福音派の聖書学者、神学者、科学者たちも、同じ道をたどりつつある。この点日本の福音派は 50 年遅れている。まずは、ゆっくり時間をかけ、真摯な学びを続け、開かれた態度を身につけていく努力が必要である。自然災害の問題を神学的扱うには、このような点からスタートしなければならない。

²⁹ 「参考資料6」の特に E(震災からの復興)と F(ポンバル侯爵)の項参照

東北の教会が、東日本大震災を契機に、教派を超えて協力し合っている姿は、多くの被災地にすばらしい証となっている。被災地の教会をはじめ、各教派、日本福音同盟、そして各支援団体のご苦勞はどれほど大きかったか、神様のみがご存知である。むろん、現場においては、たくさんの反省すべきことが生じたと思う。もう少し落ち着いたら、全体を振り返り、あらゆる問題を整理し、検証作業を行うことが大切である。次にいつ起こるか分からない自然災害に対し、万全の対策を練るためにも、そのような地道な作業が不可欠である。

災害に対処するには、地域の教会協力が不可欠である。東日本大震災はそのことをはっきり教えてくれた。このことは、エキュメニズムの概念を整理し、正しいエキュメニズムのきっかけにさせていかねばならない。日本福音同盟は、このために重要な責任を果たしていかなければならない。地域ごとに宣教会議を開催し、日本伝道会議に結び付けていく努力をしているのは、福音派しかない。各教会、各教派、各地域がそれぞれのもっている特色を生かし、エキュメニズムを進めていかねばならない。

ここで講義Ⅰを終わりたいと思う。講義Ⅱは、ここまでの学びを基に、聖書から自然災害の問題を考えたいと思う。期待していただきたい。